

スの1例を経験したので報告する。

症例は、15歳女性で、虫垂切除術後17病日より腹痛出現し、腹部単純X-P、エコー、CT等にて虫垂切除後の腹腔内膿瘍に起因する癒着性イレウスと診断した。入院後、胃管を挿入し大建中湯の注入を開始するとともに抗生物質の静脈内投与を行った。腹部単純X-Pにて入院後3日目にニボアの消失をみたが、大建中湯はひき続き経口投与を行った。その後、腸管のぜん動は回復し、腹腔内膿瘍も縮小したため、入院後19日目に軽快退院となった。

以上より、単純性イレウスに対し、大建中湯の内服を併用した保存的療法は、有効であると考えられる。

2. B型慢性肝炎患者血中のHBV-specific killer T細胞に対する小柴胡湯の効果

(消化器内科)

嶋川由美子・山内 克巳・春田 郁子・
鈴木 義之・磯野 悦子・中村 哲夫・
小幡 裕

慢性肝炎患者の肝機能改善に小柴胡湯と桂枝茯苓丸の併用が有効であることに関する報告は、これまで多く出されている。しかし、これらの薬剤の機序の詳細についてはまだ知られていない。今回、著者らは免疫学的パラメーターに及ぼす小柴胡湯の効果について検討した。

T細胞subset, mitogen誘発T細胞増殖などポリクローナル性免疫特性に関しては、本薬投与の有無による有意差は見られなかった。さらに、新規確立HBV (hepatitis B virus: B型肝炎ウイルス)・DIA移入myeloma細胞に対する慢性肝炎患者PBLの細胞障害試験では、本薬による有意の抑制が認められた。さらに、自己腫瘍特異的細胞障害性T細胞(cytotoxic T lymphocyte: CTL)活性も、本薬によって完全に抑制された。上記結果から、小柴胡湯が少なくとも抗原特異的CTL活性を抑制できることが示唆された。

以上より、肝損傷に対する小柴胡湯の効果が、免疫反応抑制効果に由来するものと思われる。

3. 活性酸素消去作用から見た柴苓湯の腎炎治療効果

(第四内科)

佐中 孜・西川 恵・小俣 正子・
樋口千恵子・佐藤 孝子・杉野 信博

腎炎やネフローゼの発症、進展には、活性酸素が深く関与しているとされる。我々は、柴苓湯に好中球由来の活性酸素を消去する作用があること、その作用は、

柴苓湯を構成する生薬のうち、桂皮(けいひ)、猪苓(ちよれい)、黄芩(おうごん)に強く存在するを見出した。

好中球の懸濁液中にPMA (phorbol myristate acetate)という刺激物質を加えると、好中球から活性酸素が放出される。このとき、懸濁液中に蛍光物質(ルミノール)を加えておくと、ルミノールと活性酸素が反応して蛍光(化学発光)が生じる。これを測定することにより活性酸素を定量できる。

この実験系に、柴苓湯を20mg/dlになるように加えたところ、好中球の化学発光はほとんど消失した。これから、好中球に由来する活性酸素の生成抑制、もしくは消去促進作用が柴苓湯にあるということが出来る。

さらに、この作用が、柴苓湯を構成する生薬のいずれかにあるかを検討した。柴苓湯を構成する12種類の生薬のうち入手できた8種類の生薬で同様な実験を行ったところ、桂皮、猪苓、黄芩の3生薬で、強力な活性酸素消去作用が確認された。なかでも、桂皮は、化学発光を抑制する物質として代表的なDMTU (dimethyl-thiourea)と同程度の効果があった。

特別講演 柴胡の薬理作用およびその作用機序一(細胞膜修飾作用からの考察)一

(近畿大学東洋医学研究所)阿部 博子

サイコサポニン(肝臓¹⁾、腎臓²⁾、免疫系³⁾)に作用するのみならず、抗炎症作用、抗アレルギー作用、抗潰瘍作用など極めて多彩な作用を示し、そのtarget organも単一ではない。私共はこのような多彩な薬理作用を統一的に理解するためには、サイコサポニンの作用点を標的臓器にではなく、各種臓器の細胞の細胞膜や核のような細胞の諸機能に強い影響力を持つ細胞内小器官に求めることが最も適切であると考えている。特に、実験的肝障害あるいはネフローゼに対する作用は、サイコサポニンのtarget organelleが細胞膜系である可能性を強く示唆している。実際、in vitro系での細胞膜系へのサイコサポニンの作用が様々な角度から検討されており、極めて興味深い結果が得られている。

サポニン類は一般に、生体膜に対して障害性を持ち、溶血現象はその代表的な作用と考えられている。サイコサポニンも 10^{-3} M以上の濃度では溶血作用が認められる⁴⁾。ところが、サイコサポニンの濃度を 10^{-5} ~ 10^{-7} Mの低濃度にすると、非ステロイド系の抗炎症